

監修 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

講談社

大衆文学大系

菊池 寛

久米 正雄

大衆文学大系7 岡本綺堂 菊池寛 久米正雄 集

昭和四十六年十月二十日 第一刷

著者 岡本綺堂 菊池寛 久米正雄

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二―二十一 郵便番号 一一二
電話東京〇三九四五―一一二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 二八〇〇円

◎岡本経一 菊池英樹 久米昭二 一九七一年
落し本・乱し本はおとりかえいたしません

目次

岡本綺堂集

三浦老人昔話

五

青蛙堂鬼談

九

半七捕物帳

二七

菊池寛集

第二の接吻

三五

三家庭

四三

仇討新八景

五六

久米正雄集

螢

草

解 說

八
四

解 題

八
三

年 譜

八
五

岡本綺堂集

三浦老人昔話

桐畑の太夫

一

今から二十年あまりの昔である。なんでも正月の七草すぎの日曜日と記憶している。わたしは午後から半七老人の家をたずねた。老人は彼の半七捕物帳の材料を幾たびかわたしに話して聞かせてくれるので、きょうも年始の礼を兼ねてあわ好くば又なにかの昔話を聞き出そうと巧んで、から風の吹く寒い日を赤坂まで出かけて行つたのであった。

格子をあけると、沓ぬぎには新しい日和下駄がそろえてある。この頃はあまり世間と交際をしないらしい半七老人の家に、さすがは春だけに来客があると思っていると、わたしの案内を聞いておなじみの老婢がすぐに出て来た。広くもない家で

あるから、わたしの声が筒ぬけに奥へきこえたらしい。横六畳の座敷から老人は声をかけた。

「さあ、お通りください。あらたまったお客様じゃありませんから。」

わたしは遠慮なしに座敷へ通ると、主人とむかい合つて一人の年始客らしい老人が坐っていた。主人も老人であるが、客は更に十歳以上も老けているらしく、相当に時代のついでらしい糸織りの二枚小袖に黒斜子の三つ紋の羽織をかきねて、行儀よく坐っていた。お定まりの屠蘇や重詰物もならべられて、主人も客もその顔をうすく染めていた。主人に対して新年の挨拶がすむと、半七老人は更にその客の老人をわたしに紹介した。

「こちらは大久保にお住居の三浦さんとおっしゃるので……。」
初対面の挨拶が型の通りに交換された後に、わたしも主人から屠蘇をすゝめられた。ふたりの老人と一人の青年とがすぐに打解けて話しはじめると、半七老人は更に説明を加えて再び彼の客を紹介した。

「三浦さんも江戸時代には下谷に住まわっていて、わたしとは古いお馴染です。いえ、同商売じゃありませんが、まんざら縁のない方でもないのです……。番所の腰掛では一緒になったこともあるんですよ。はーい、はーい。」

三浦という老人は家主で、その時代の詞でいう大屋さんであった。江戸時代にはなにかの裁判沙汰があれば、かならずその町内の家主が関係することになっているので、岡っ引を勤めていた半七老人とはまったく縁のない商売ではなかった。ことに神田と下谷とは土地つきでもあるので、半七老人は特にこの三浦老人と親しくしていたらしかった。そうして、維新以後の今日まで交際をつづけているのであった。

「むかしは随分おたがい仲好くしていたんですがね。」と、三浦老人は笑いながら云った。「このごろは大久保の方へ引込んでしまったもんですから、どうも、出不清になって……。いくら達者だと云っても、なにしろこの主人にくらべると、丁度一とまわりも上なんですよ、口ばかり強そうなことを云つても、からだやあんよが云うことを肯きませんや。それだもんですから自然御無沙汰勝たなくなってしまつて、今日もこゝまで出て来るには眼あきの朝顔という形なんですからね。いやもう意気地はありません。」

かれは持つてゐる煙管を握つて、杖をつく形をしてみせた。勿論、そのころの東京にはまだ電車が開通していなかったのである。

「それでも三浦さんはまったく元気がいい。殊に口の方はむかしよりも達者になったらしい。」と、半七老人も笑いながらわたしを見かけた。「あなたは年寄りのむかし話を聴くのがお好きだが、おひまがあつたら今度この三浦さんをたずねて御覧なさい。この人はなか／＼面白い話を知っています。わたくしのお話はいつでも十手や捕縄の世界にきまつていますすけれども、こちらの方は領分がひろいから、色々の変つた世界のお話を聴かせてくれますよ。」

「いや、面白いお話なんていうのはありませんけれど、時代おくれの昔話で宜しければ、せい／＼お古いところをお聴きに入れます。まことに辺鄙な場末ですけれども、お閑のときには何うぞお遊びにおいでください。」と、三浦老人も打解けて云つた。

今とちがつて、その当時の大久保のあたりは山の手の奥で、鷹野でも見物にゆくほかには余りに足の向かないところであつたが、わたしはそんなことに頓着しなかった。わたしは半七老

人から江戸時代の探偵ものがたりを聴き出すのと同じような興味を以て、この三浦老人から何かの面白い昔話を聴きたいと思つた。新しい話を聴かせてくれる人は沢山ある、寧ろだんだんに殖えてゆくくらいであるが、古い話を聴かせてくれる人は曉方の星のようにだん／＼に消えてゆく。今のうちに少しでも余計に聴いて置かなければならないという一種の慾も手伝つて、わたしはあらためて三浦老人訪問の約束をすると、老人は快く承知して、どうで隠居の身の上ですからも遊びにいらつしやいと云つてくれた。

その次の日曜日は陰つてゐた。底冷えのする日で、なんだか雪でも運び出して来そうな薄暗い空模様であつたが、わたしは思い切つて午後から麴町の家を出て、大久保百人町まで人車に乗つて行つた。車輪のめり込むような霜どけ道を幾たびか曲りまわつて、よう／＼に杉の生垣のある家を探しあてると、三浦老人は自身に玄関まで出て来た。

「やあ、よく来ましたね。この寒いのに、お強いこつてすね。さあ、さあ、どうぞおあがりください。」

南向きの広い庭を前にしている八畳の座敷に通されて、わたしは主人の老人とむかい合つた。

二

わたしは自分と三浦老人との関係を説くのに、あまり多くの筆や紙を費し過ぎたかも知れない。早くいえば、前置きがあまり長過ぎたかも知れないが、これから次々にこの老人の昔話を紹介してゆくには、それを語る人がどんな人物であるかと云うことも先づ一通りは紹介して置かなければならないのである。しかしこの上に読者を倦ませるのはよくない。わたしはすぐに本文に取りかゝつて、この日に三浦老人から聴かされた江戸も

のがたりの一つを紹介しようと思う。

三浦老人はこう語った。

今日の人たちは幕末の土風類聚ということをよく云いますが、徳川の侍だって揃いも揃って腰ぬけの意気地無しばかりではありません。なかには今日でも見られないような、随分しっかりした人物もありました。併し又そのなかには随分だらしない困り者があつたのも事実で、それを証拠にして、さあ何うだと云われると、まったく返事に詰まるわけです。そのだらしないと云われる仲間の中には、又こんな風変りのもありました。

これはわたくしが子供の時に聞いた話ですから、天保初年のこと、思ってください。赤坂の桐畑^{きりばたけ}のそばに小坂丹下という旗本がありました。千五百石の知行取りで、その先代はお目附を勤めたとか聞いています。百石以上は旗本ですけれども、それらは所謂貧乏旗本で、先ずほんとうの旗本らしい格式を保ってゆかれるのは少くも三百石以上でしょう。五百石以上となれば立派なお歴々で、千石以上となれば大身、それこそ大威張りのお殿様です。そこで、この小坂さんの屋敷は千五百石というのですから、立派なお旗本であることは云うまでもありません。

当主の丹下という人は今年三十七の御奉公盛りですが、病気の届け出でして五年まえから無役の小普請入りをしてしまいました。学問もある人で、若い時には聖堂の吟味に甲科で白銀三枚の御褒美を貰い、家督を相続してからも勤め向きの首尾もよく、おい／＼出世の噂もきこえていたのですが、二十五六のときから此人にふと魔がさした。というのは、この人が芸事に凝り始めたのです。芸事も色々ありますが、清元の浄瑠璃に

凝り固まってしまったのだから些と困ります。なんでもその皮切りは、同役の人の下屋敷へ呼ばれて行ったときに、その酒宴の席上で清元の太夫と知合いになったのだと云いますが、その先代も赤坂あたりの常磐津の女師匠を聞いものにしていたとか云う噂がありますから、遊芸については幾らか下地があるというほどで無くとも、相当の趣味はあつたのかも知れません。いずれにしても、その清元の師匠を自分の屋敷へよんでお稽古をはじめたのです。

おなじような理窟ですけれども、これが謡の稽古でもして、熊坂や船弁慶を唸るのなら格別の不思議もないのですが、清元の稽古本にむかつておかる勘平や権八小紫を歌うことになる、どうもそこが妙なことになります。と云って、これがひどく筋の悪いこと、云うほどでもないのですが、奥様や用人も聞き直って意見をするわけにも行かず、困った道楽だと苦々しく思いながらも、先ずそのまゝにして置くうちに、主人の道楽はいよ／＼募つて来て、もう一廉の太夫さん氣取りになってしまったのです。

むかしから素人の芸事はあまり上達しないにきまつたもので、俗に素人芸、旦那芸、殿様芸、大名芸などと云って、先ず上手でないのが当りまえのようになっていのですが、この小坂という人ばかりは例外で、好きこそ物の上手なりけりと云うのか、それとも一種の天才というのか、素人芸や殿様芸を通り越して、三年五年のうちにめき／＼と上達する。第一に喉が好い。三味線も達者にひく。ふだんは苦々しく思っている奥様や用人も、春雨のしんみりと降る日に、非番の殿様が爪びきで明鴉^{めいあ}か何かを語っていると、思わずうっとり聴き惚れてしまふと云うようなわけですから、師匠もお世辞を抜きにしてほんとうに褒める。当人は一心不乱に稽古する。師匠も身を入れて教

える。それが自然と同役のあいだにも伝わって、下屋敷などでは何かの酒宴でも催すというような場合には、小坂をよんで一段語らせようではないかと云うことになる。当人もよるこんで出かけてゆく。それが続いているうちに、世間の評判がだん／＼に悪くなりました。

一方にこれほど浄瑠璃に凝りかたまっていながらも、小坂という人は別に勤め向きを怠るようなこともありませんでした。とんだ三段目の師直ですが、勤めるところは屹と勤める武蔵守と云った風で、上の御用はかゝらずに勤めていたのですが、どうも世間の評判がよろしくない。まえにも云う通り、おなじ歌いものでも弁慶や熊坂とちがって、権八や浦里ではどうも困る。それも小身者の安御家人かお城坊主のたぐいならば格別、なにしろ千五百石取りのお歴々のお旗本が粹な喉をころがして、「情は売れど心まで」などと遣っているのでは、理窟は兎もあれ、世間が承知しません。武士にあるまじきとか、身分柄をも憚らずとか云うような批難の声がだん／＼に高くなってくるので、支配頭も聞きながしているわけにも行かなくなりまして。勿論、親類縁者の一門からも意見や苦情が出てくるという始末。と云って、小坂丹下、家代々の千五百石の知行をなげ出して、今更清元をやめることは出来ないで、結局病氣と云い立て、無役の小普請組に這入ることになりました。

小普請に這入れば何をしてもいゝと云うわけでは勿論無いのですが、それでも小普請となると世間の見る目がずつと違つて来ます。もう一步すゝんで寧ろ隠居してしまえば、殆ど何をしても自由なのですが、家督相続の子供がまだ幼少であるので、もう少し成長するのを待つて隠居するという下心であつたらしく、先ずそれまでは小普請に這入って、やかまし世間の口を塞ぐ積りで、自分から進んで無役のお仲間入りをしたので

しょう。それについても定めて内外から色々の苦情があつたことゝ察しられますが、当人が飽までも遊芸に執着しているのだから仕方がありません。小坂さんはとう／＼自分の思い通りの小普請になつて、さあこれからはおれの世界だとばかりに、大びらで浄瑠璃道楽をはじめることになりました。いや、もうその頃は所謂お道楽を通り越して、本式の芸というものになつていたのです。

こうなると、自分の屋敷内で遠慮勝に語ったり、友だちの家へ行つて慰み半分に語ったりしているだけでは済まなくなりまして。当人はどこまでも真剣です。だん／＼と修業が積むにつれて、自然と芸人附合をも始めるようになって、諸方のお淩いなどへも顔を出すと、それがまったく巧いのかから誰でもあつと感服する。桐畑の殿様を素人にして置くのは勿体ないなどと云う者もある。当人もいよ／＼乗氣になつて、浜町の家元から清元喜路太夫という名前まで貰うことになつてしまいました。勿論それで飯を食うというわけではありませんが、千五百石の殿様が清元の太夫さんになつて、肩衣をつけて床にあらがるというのですから、世間に類の少いお話と云つていゝでしょう。清元の仲間では桐畑の太夫さんと呼んでいました。道楽もこゝまで徹底してしまふと誰もなんとも云いようがありません。屋敷内の者も親類縁者の人達も、もう諦めたのか呆れたのか、正面から意見がましいことを云い出す者もなくなつて、唯いたづらに当人の自由行動をながめているばかりでした。

さてこれからがお話の本文で、この喜路太夫の身のうえに一大事件が出来したのです。

三

まえにも申上げた通り、天保初年の三月末のことだそうで

す。芝の高輪たかねの川がわと云う料理茶屋で清元の連中のお浚うしいがありました。今日とちがつて、江戸時代の高輪は東海道の出入口というのでなく、繁昌したものです。殊に御殿山のお花見が大層賑にぎいました。お浚うしいは昼の八つ午後二時頃から夜にかけて催もよほされることになって、大きい桜のさいている茶屋の門口に、太夫の連名を筆太にかいた立看板が出ているのを見ると、そのうちに桐畑の喜路太夫の名も麗々しく出ていました。

このお浚うしいは昼のうちから大層な景気で、茶屋の座敷には一杯の人が押掛けています。日がくると門口には紅い提灯をつける。内ばかりでなく、表にも大勢の人が立っている。そこへ通りかゝった七八人連の男は、どれも町人や職人風で、御殿山の花見帰かへりらしく、真紅まかに酔った顔をしてよろけながらこの茶屋のまえに来かゝりました。

「やあ、こゝに清元の浚うしいがある。馬鹿に景気がいゝぜ。」立ちどまつて立看板をよんでいるうちに、その一人が云いました。

「おい、おい。このなかで清元喜路太夫というのは聞かねえ名だな。どんな太夫だろう。」

「むゝ。おれも聞いたことがねえ。下手か上手か、一つ這入って聴いて遣はなろうじゃねえか。」

酔っているから遠慮はない。この七八人はどや／＼と茶屋の門を這入って、帳場のまえに来ました。

「もし、喜路太夫と云うのはもうあがりましたかえ。」

「いえ、これからでございます。」と、帳場にいる者が答えました。なんと云つても幾らかの遠慮がありますから、小坂さんの喜路太夫は夜になってから床にあがることになっていたのです。

「じゃあ、丁度いゝ。わっし等にも聴かせておくんなせえ。」

「皆さんはどちらの方でございます。」

「わっし等はみんな土地の者さ。」

「どちらのお弟子さんで……。」

「どこの弟子でもねえ。たゞ通りかゝったから聴きに這入ったのよ。」

浄瑠璃のお浚うしいであるから、誰でも無暗に入れると云うわけには行かない。殊にどの人もみんな酔っているの、帳場の者は体よく断りました。

「折角でございますが、今晩は通りがかりのお方をお入れ申すわけにはまいりません。どうぞ悪しからず……。」

「わからねえ奴だな。おれ達は土地の者だ。今こゝのまえを通ると清元の浚うしいの立看板がある。ほかの太夫はみんなお馴染だが、そのなかに唯ただ一人、喜路太夫というのが判らねえ。どんな太夫だか一段聴いて、上手ならば最良さいりやうにしてやるんだ。そのつもりで通してくれ。」

酔った連中はずん／＼押上ろうとするのを、帳場の者どもはあわてゝ遮さへりました。

「いけません、いけません。いくら土地の方でも今晩は御免を蒙ります。」

「どうしても通さねえか。そんならその喜路太夫をこゝへ呼んで来い。どんな野郎だか、面をあらためて遣る。」

なにしろ相手は大勢で、みんな酔っているのだから、始末が悪い。帳場の者も持余していると、相手はいよ／＼大きな声で怒鳴り出しました。

「さあ、素直におれ達を通して浄瑠璃を聴かせるか。それとも喜路太夫をこゝへ連れて来て挨拶させるか。さあ、喜路太夫を出せ。」

この措着そさくの最中に、なにかの用があつて小坂さんの喜路太夫

が生憎に帳場の方へ出て来たのです。しきりに喜路太夫という名をよぶ声が耳に這入ったので、小坂さんは何かと思つて出てみると、七八人の生酔いが入口でがや／＼騒いでいる。帳場のものは小坂さんがなまじい顔を出しては却つて面倒だと思つたので、一人がそばへ行つて小声で注意しました。

「殿様、土地の者が酔つ払つて来て、何かぐず／＼云つてるのでございます。あなたは結構い下さらない方がよろしゅうございませう。」

「む。土地の者がぐずりに来たのか。」

むかしは遊芸の浚いなどを催していると、質のよくない町内の若い者や小さい遊び人などが押掛けて来て、なんとか引つからんだことを云つて幾らかの飲代をいたぶつてゆくことが往々ありました。世間馴れている小坂さんは、これも大方その仲間であらうと思つたのです。そう思つたら猶更のこと、帳場の者にまかせて置けばよかつたのですが、そこが矢はり殿様で、自分がか／＼と入口へ出てゆきました。

「失礼であるが、今夜はこちらも取込んでおります。ゆつくりとこゝで御酒をあげていると云うわけにも行かない。どうかこれで、ほかへ行つて飲んでください。」

小坂さんは紙入から幾らかの銀を出して、紙につゝんで渡そうとすると、相手の方ではいよ／＼怒り出しました。

「やい、やい。人を馬鹿にしやあがるな。おれたちは錢貰いに来たんじゃないやあねえ。喜路太夫をこゝへ出せというんだ。」

「その喜路太夫はわたしです。」

「む。喜路太夫は手前か。怪しからねえ野郎だ。ひとを乞食あつかいにしやあがつて……。」

なにしろ酔っているから堪らない。その七八人がいきなり小坂さんを土間へひき摺り下して、袋叩きにしてしまったので

す。旗本の殿様でも、大小を楽屋にかけてあるから丸腰です。勿論、武芸の心得もあつたのでしようが、この場合、どうすることも出来ないで、おめ／＼と町人の手籠めに逢つた。帳場の者もおどろいて止めに這入つたが間に合わない。その乱騒ぎのうちに、どこか撲ち所が悪かったとみえて、小坂さんは氣をうしなつてしまつたので、乱暴者も流石にびっくりして皆ちりちりに逃げて行きました。それを追つかけて取押えるよりも、先ず殿様を介抱しなければならぬと云うので、家中は大騒ぎになりました。

すぐに近所の医者をもよんで来て、いろ／＼の手当をして貰いましたが、小坂さんはどうしても生き返らないで、とう／＼其儘に冷くなつたので、関係者はみんな蒼くなつてしまいました。もうお浚いどころではありません。兎もかくも急病の体にして、死骸を駕籠にのせて、竊と赤坂の屋敷へ送りとゞけると、屋敷でもおどろきましたが、場所が場所、場合が場合ですから、なんとも文句の云い様がありません。旗本の主人が清元の太夫になつて、料理茶屋のお浚いに出席して、しかも町人にぶち殺されたなど云うことが表沙汰になれば、家断絶ぐらいの御咎めをうけないとも限りませんから、残念ながら泣寝入りにするより外はありません。今年十五になる丹三郎という息子さんは、お父さんが大事にしていた二挺の三味線を庭へ持ち出して、脇差を引きぬいてその棹を真二つに切りました。皮をすた／＼に突き破りました。

「これがせめてもの仇討だ。」

小坂さんは急病で死んだことに屈けて出て、表向きは先ず無事に済んだのですが、その初七日のある日、八人の若い男が赤坂桐畑の屋敷へたずねて来て、玄関先でこういうことを云い入れました。

「わたくし共は高輪辺に住っております者でございますが、先日御殿山へ花見にまいりまして、その帰り途に川与という料理茶屋のまえを通りますと、その家に清元の浚いがございます。ついぞ名前を聞いたことのない太夫ですから、一段聴いてみようとして這入りますと、帳場の者が入れないという。こっちは酔っておりますので、是非入れてくれ、左もなければその喜路太夫というのをこゝへ出して挨拶せよと、無理を云って押問答しておりますところへ、奥からその喜路太夫が出て来て、今夜は入れることは出来ないから、これで一杯飲んでくれと云って、幾らか紙につゝんだものを出しました。くどくも申す通り、こっちは酔っておりますので、ひとを乞食あつかいにすると怪しからねえと、喧嘩にいよ／＼花が咲いて、とう／＼その喜路太夫を袋叩きにしてしまいました。それでまあ一旦は引きあげたのですが、あとでだん／＼うけたまわりますと、喜路太夫と申すのはお屋敷の殿様だそうで、実にびっくり致しました。まだそればかりでなく、それが基で殿様はおなくなり遊ばしましたそうで、なんと申上げてよろしいか、実に恐れ入りました次第でございます。就きましては、その御詫として、下手人一同うち揃つてお玄閼まで罷り出ましたから、なにとぞ御存分のお仕置をねがいませう。」

小坂の屋敷でも挨拶に困りました。憎い奴等だとは思つても、こゝで八人の者を成敗すれば、どうしても事件が表向きになつて、一切の秘密が露頭することになるので、絶対に用人は飽までもシラを切つて、当屋敷に於ては左様な覚えは曾て無い、それは何かの間違いであらうと云い聞かせましたが、八人の者はなか／＼承知しない。清元喜路太夫はたしかにお屋敷の殿様に相違ない。知らないことゝは云いながら、お歴々のお

旗本を殺して置いて唯そのまゝに済むわけのものでないから、こうして御成敗をねがいに出たのであるが、お屋敷でどうしても御存じないとあれば、わたくし共はこれから町奉行所へ自訴して出るより外はないと云い張るのです。

これには屋敷の方でも持てあまして、いづれ当方からあらためて沙汰するからと云つて、一旦は八人の者を追い返して置いて、それから土地の岡つ引か何かをたのんで、二百両ほどの内済金を出して無事に済ませたそうです。主人をぶち殺された上に、あべこべに二百両の内済金を取られるなどは、随分ばかりしい話のようですけれども、屋敷の名前には換えられません。重々気の毒なことでした。

八人の者は勿論なんにも知らないで、たゞの芸人だと思つて喜路太夫を袋叩きにして、それがほんとうに死んだと判り、しかもそれが旗本の殿様とわかつて、みんなも一時は途方にくれてしまったのですが、誰が悪い奴が意地をつけて、相手の弱味につけ込んで、逆ねじにこんな狂言をかけたのだと云うことです。わたくしの親父も一度柳橋の茶屋で喜路太夫の小坂さんの浄瑠璃を聴いたことがあるそうですが、それはまったく巧いものだったと云うことです。なまじい千五百石の殿様に生れなかつたら、小坂さんも天晴れの名人になられましたのかも知れません。そう思うと、たゞ一口にだらしない困り者だと云つてもいられません。なんだか惜しいような気がします。いつの代にも斯ういうことはあるのでしようが、人間の運不運は判りませんね。

「いや、根っから面白くもないお話で、さぞ御退屈でしたらう。」と、云いかけて三浦老人は耳をかたむけた。「おや、降つて来ましたね。なんだか音がするようです。」

老人は起つて障子をあげると、いつの間にもふり出したのか、庭の先は塩をまいたように薄白くなつていた。

「とう／＼雪になりました。」

老人は縁先の軒にかけてある鶯の籠をおろした。わたしもそろ／＼帰り支度をした。

「まあ、いゝじゃありませんか。初めてお出でなすつたのですから、なにか温かいものでも取らせましょう。」

「折角ですが、あまり積もらないうちに今日はお暇いたしました。いづれ又ゆっくり伺います。」と、私は辞退して立ち去った。

「そうですか。なにしろ足場の悪いところですから、無理にお引留め申すわけにも行かない。では、又御ゆっくりおいで下さい。こんなお話でよろしければ、なにか又思い出して置きますから。」

「はあ。是非またお邪魔にあがります。」

挨拶をして表へ出る頃には、杉の生垣がもう真白に塗られていた。わたしは人車を待たせて置かなかつたのを悔んだ。それでも洋傘を待つて来たのを仕合わせに、風まじりの雪のなかを停車場の方へ一足ぬきに辿つて行つた。その途中は随分寒かつた。

春の雪——その白い影をみるたびに、わたしは三浦老人訪問の第一日を思い出すのである。

鎧櫃の血

一

その頃、わたしは忙しい仕事を持っていたので、兎かくにどこへも御無沙汰勝であつた。半七老人にも三浦老人にもしばらく逢う機会がなかつた。半七老人はもうお馴染みでもあり、わたしの商売も知っているのであるから、ちつとぐらゐ無沙汰をしても格別に厭な顔もされまいと、内々多寡をく／＼っているのであるが、三浦老人の方はまだ馴染のうすい人で、双方の気心もほんとうに知れていないのであるから、たつた一度顔出しをしたがりで、黽の道をきめては悪い。そう思いながらも矢はり半日の暇も惜しまれる身のうえで、今日こそはという都合のいゝ日が見付からなかつた。

その年の春はかなりに余寒が強くて、二月から三月にかけても天からたび／＼白いものを降らせた。わたしは軽い風邪をひいて二日ほど寝たこともあつた。なにしろ大久保に無沙汰をしていることが氣にかゝるので、三月の中頃にわたしは三浦老人にあてゝ無沙汰の詫言を書いた郵便を出す、老人からすぐに返事が来て、自分も正月の末から持病のリウマチで寝たり起きたりしていたが、此頃はよほど快くなつたとのことであつた。そう聞くと、自分の怠慢がいよ／＼悔まれるような氣がして、わたしはその返事をうけ取つた翌日の朝、病氣見舞をかねて大久保へ第二回の訪問を試みた。第一回の時もそうであつたが、今度はいよ／＼路がわるい。停車場から小一町をたどるあ

いだに、わたしは幾たびか雪解のぬかるみに新しい足駄を吸収されそうになった。目おぼえの杉の生垣の前まで行き着いて、わたしは初めてほっとした。天気の良い日で、額には汗が滲んだ。

「この路の悪いところへ……。」と、老人は案外に元気よくわたしを迎えた。「粟津の木曾殿で、大変でしたらう。なにしろここらは鴈鴨の咲くまでは、江戸の人の足踏みするところじゃありませんよ。」

まったく其頃の大久保は、霜解と雪解とで往来難渋の里であつた。そのぬかるみを突破してわざ／＼病氣見舞に來たというので、老人はひどく喜んでくれた。リュウマチスは多年の持病で、二月中は可なりに強く悩まされたが、三月になってからは毎日起きてゐる。殊にこの四五日は好い日和がつどくので、大変に体の工合がいくという話を聴かされて、わたしは嬉しかった。

「でも、このごろは大久保も馬鹿に出来ませんぜ。洋食屋が一軒開業しましたよ。きょうはそれを御馳走しますからね。お牛過ぎまで人質ですよ。」

こうして足留めを食わして置いて、老人は打ちくつろいで色色のむかし話をはじめた。次に紹介するのもその談話の一節である。

このあいだは桐畑の太夫さんのお話をしましたが、これもやはり旗本の一人のお話です。これは前の太夫さんとは段ちがいで、おなじ旗本と云つても二百石の小身、牛込の揚場に近いく所に屋敷を有っている今宮六之助という人です。この人が嘉永の末年に御用道中で大阪へゆくことになりました。大阪の城の番士を云い付かつて、一種の勤番の格で出かけたのです。よ

その藩中と違って、江戸の侍に勤番というものは無いのです。が、それでも交代に大阪の城へ詰めさせられます。大阪城の天守が雷火に焚かれたときに、そこにしまつてある権現様の金の扇の馬標を無事にかつぎ出して、天守の頂上から堀のなかへ飛び込んで死んだという、有名な中川帯刀もやはりこの番士の一人でした。

そんなわけですから、甲府詰などとは違って、江戸の侍の大阪話は決して悪いものではありませんので、今宮さんも大威張りでお出かけた行つたのです。普通の旅行ではなく、御用道中というのですから、道中は幅が利きます。何のなにがしは御用道中で何月何日にはどこを通るといふことは、前以て江戸の道中奉行から東海道の宿々に達してありますから、ゆく先々ではその準備をして待ち受けていて、万事に不自由するようなことはありません。泊りは本陣で、一泊九十六文、昼飯四十八文というのですから実に安いものです。駕籠に乗つても一里三十二文、それもこれも御用という名を頂いているおかげで、弥次喜多の道中だってなか／＼こんなことでは済みません。主人はまあそれでもいいとして、その家来共までが御用の二字を嵩にきて、道中の宿々を困らせてあるいたのは悪いことでした。

早い話が、御用道中の悪い奴に出つくわすと、駕籠屋があべこべに強請られます。道中で客が駕籠屋や雲助にゆすられるのは、芝居にも小説にもよくあることですが、これはあべこべに客の方から駕籠屋や雲助をゆするのでから怖ろしい。主人というほどの人は流石にそんなこともしませんが、その家来の若党や中間のたぐい、殊に中間などの悪い奴は往々それを遣つて自分たちの役得と心得ている。たとえば、駕籠に乗つた場合に、駕籠のなかで無暗にからだを揺する。客にゆすられては担いでゆくものが難儀だから、駕籠屋がどうかお静かにねがいますと

云つても、知らない顔をしてわざと揺する。云えば云うほど、ひどく揺する。駕籠屋も結局往生して、内所で幾らか掴ませることになる。ゆすると云う詞はこれから出たのか何うだか知りませんが、なにしろ斯ういう風にしてゆするのだから堪りません。それが又、この時代の習慣で、大抵の主人も見て見ぬ振をしていたようです。それに余りにやかましく云えば、おれの主人は野暮だとか判らず屋だとか云って、家来どもに見限られる。まことにむずかしい世の中でした。

今宮さんは若党ひとりと中間三人の上下五人で、荷かつぎの人は足は宿々で雇うことにしていました。若党は勇作、中間は半蔵と勘次と源吉。主人の今宮さんは今年三十一で、これまで御奉公に首尾もない。勿論、首尾のわるい者では大阪詰にはなりませんまいが、先ずは一通りの武家氣質の人物。たゞこの人の一つの道楽は食い道楽で、食い物の好きがひどくむずかしい。今度の大阪詰についても、本人はたゞそれだけを苦にしていたが、どうも仕様がな。大阪の食い物にはおい／＼に馴れるとしても、当座が困るに相違ない。殊に大阪は醤油がよくないと聞いているから、せめては当座の使い料として醤油だけでも持つて行きたいという註文で、銚子の亀甲万一樽を買わせたが、扱さそれを持つて行くのに差支えました。

武家の道中に醤油樽をかつがせては行かれない。と云って、何分にも小さいものでないから、何かの荷物のなかに押込んで行くというわけにも行かない。その運送に困った挙句に、それを鎧櫃に入れて行くということになりました。道中の問屋場にはそれ／＼に公定相場と云うようなものがあって、人足どもにかつがせる荷物もその目方によって運賃が違ふのですが、武家の鎧櫃にかぎって、幾らそれが重くても所謂「重た増し」を取らないことになっていましたから、鎧櫃のなかへは色々のものを

を詰め込んで行く人がありました。今宮さんも多分それから思いついたのでしょうが、醤油樽は随分思い切っています。殊にその樽を入れてしまえば、もうその上に鎧を入れる余地はありません。鎧が大事か、醤油が大事かと云うことになつても、やはり醤油の方が大切であつたとみえて、今宮さんはとう／＼自分の鎧櫃を醤油樽のかくれ家とぎめてしまいました。しかし鎧を持つて行かないでは困るので、鎧の袖や草摺をばら／＼に外して、籠手も腰当も別々にして、ほかの荷物のなかへ何うにか斯うにか押込んで、先ず表向きは何の不思議も無しに江戸を立つことになりました。

それは六月の末、新暦で申せば七月の土用のうちですから、夏の盛りで暑いことおびたゞしい。武家の道中は道草を食わないので、はじめの日は程ヶ谷泊り、次の日が小田原、その次の日が箱根八里、御用道中ですから勿論関所のしらべも手輕にすんで、その晩は三島に泊る。こゝまでは至極無事であつたのですが、そのあくる日、江戸を出てから四日目に三島の宿を立つて、伊賀越の浄瑠璃でおなじみの沼津の宿をさして行くことになりました。上下五人の荷物は兩掛けにして、問屋場の人足三人がかついで行く。主人だけが駕籠に乗つて、家来四人は徒歩で附いて行く。兎かく説明が多くなるようですが、この人足も問屋場に詰めているのは皆おとなしいもので、決して悪いことをする筈はないのです。もし悪いことをして、次の宿の問屋場にその次第を届け出られれば、すぐに取押えて牢に入れられるか、あるいは袋叩きにされて所払いを食うか、いづれにしても手ひどい祟をうけることになっているのですから、問屋場にいろものは先ず安心して雇えるわけです。しかしこの問屋場に係り合のない人足で、彼の伊賀越の平作のように、村外れや宿はずれにうろ付いて客待をしている者の中には、所謂雲助根性